

本代表に加わっていい作品だ。「精神の世界を性の深みを通して描く作家」。そう言われることも多い吉行さんだが、その中心にあるのは戦争体験だった。

吉行さんが94年7月に70歳で亡くなる半年前、その「夢

新型コロナウイルス感染症が人類を死の恐怖に陥れている。日本のいくつかの大病院では医療崩壊の危機に直面している。

森から出た人類の祖先は直立二足歩行を始めた。これは手が自由になり、脳が発達することでもあった。

そのために環境に働きかけ、長い年月をかけて現在の文明社会を築いてきた。

環境を人類の都合に合わせて歩みでもある。人類ファーストは、自然界から多くの被害を受けてきているが人類は知恵と工夫で突っ走ってきた。人間間での戦争も絶えることがない。

現在は騒がれなくなっているが、結核は死の病といわれて恐れられた。今でも結核で亡くなる人はいるが、昔のようではない。ワクチンや治療薬が見つかったためである。

詩集『動物哀歌』の著者である村上昭夫(以下、昭夫)は結核で四十一歳の生涯を閉じねばならなかった一人である。

「死」という未知なもの

が、さまざまな動物や植物

それに、実にたくさんの人間の形態となって姿を見せました。それらのものを懸命になってノートや原稿に書きしるしました。それが『動物哀歌』となって世に出ました。

昭夫の晩年受賞の記

お見舞いに来た家族に対し、昭夫は早く帰れ、と言う入院患者であった。帰っていく後姿を布団の中から手鏡で追う昭夫。

現在、刊行準備を進めている『村上昭夫著作集1』には、これまで未発表だった九十五篇の詩を収録することができた。新しい原稿には地名のついた作品も多い。地名があるということは、昭夫の行動半徑を知ることにもつながる。

長く入院していると、周囲の人のことなど黙っていても耳に入ってくる。

ひるは病院で白衣を着て、夜はキャバレーで客と接するとうろ／(略)／大人よ／みだらな軽蔑の目は消し

たらいい／女には子供があ



吉行淳之介さんは旧制静岡原爆で失っている。「2人と語っていた」=1985年3月

文化の森

村上昭夫作品を読み直す

寄稿 詩人・北畑光男(岩手県出身)

迫る危機 どう生きる



鳥居さんの「夢の口」のEに「空にはいつも飛行機が飛んだ。無数に飛行機が飛び、私は不安におののいたことが書かれている。」

夢がある人、これから見つける人、今できることには何でも挑戦し、食欲に吸収して。将来、コロナ禍を乗り越えた行動が、誇れる自信をつくったと胸を張れるように。(八重樫慎之介)

きたはたけ・みつお 1946年生まれ、岩泉町出身。詩人。詩集「足つらの冬」「飢饉考」で第34、37回日本文学賞候補。92年「救済まで」で富田碎花賞受賞。2011年詩集「北の蜻蛉」で第19回丸山薫賞受賞。17年評論集「村上昭夫の宇宙哀歌」で第14回日本詩歌句随筆評論大賞随筆評論部門優秀賞。詩誌「歷程」「撃竹」創刊同人。村上昭夫研究誌「雁の声」主宰。埼玉在住。

るといふことを子供にはなによりにもまして母様であることを私にはあなたにそれを言おう／女のためでなく／私もあなたを含めた人間のために「看護婦」部分

偏見からくる差別の恐ろしさを、あえて昭夫は(女のためでなく／私もあなたを含めた人間のために)と自戒を込めて書いていることに注目したい。

パンパンガールが生命保険に入ると言った／住所も決まっていなくて／父なし子があるんだと(略)／ああ 聖母マリヤ／世の幾人の人達が／あの女より勝れているというのか

「パンパンガール」部分

「パンパンガール」の詩は、内容は異なるが、ドストエフスキーの『罪と罰』にでてくる、娼婦ソーニヤの苦しみと自己犠牲の生き方に通底するものがありはしないか。昭夫の人間観の特質を示した作品である。歌う詞も昭夫は作詞していた。

新しく収録した作品群には昭夫の詩を書くきっかけになった作品や入院初期ともいえる作品もあり、死や恋愛に悩む詩もある。偉大な仕事を成した詩人でも、初めから優れた詩を書けたわけではないことを本詩集から感じ取って頂ければ幸いです。キリストを書いた作品、性と愛の間で悩む姿なども、詩人誕生の大切な精神史になる。

また、昭夫の詩を英訳で三十七篇掲載することがで

きた。この英訳により昭夫の詩が世界中の人の心に届くことを願っている。生物(人類)をとりまく環境は悪化してきている。生物多様性が失われ、台風の大規模化、プラスチックごみや海洋汚染、土壌汚染、水の汚染、大気汚染、原発事故で発生する放射線被ばく、有害な化学物質の問題など挙げればまだまだある。

本年(二〇二〇年)初めに恐るべきニュースが世界中を駆けめぐった。核戦争で人類が滅びるまでの残っている時間は一分四十秒と発表されたのだ(原子力科学者会報「世界終末時計」)。核戦争の危機にも直面している。今は何でも人類ファーストなのだ。ある国々の権力者たちは軍事力を宇宙にまで展開しようとしてい

る。

六十五年前(一九五五年)に昭夫は核戦争後の世界を次のように書いている。闘いという闘いが総て終わりを告げ／一匹の虫だけが静かにうたっている／その時／例えばコロロギのようなものかも知れない／五億年以前を鳴いたという／その無量のかなしみをこめて／星雲いっばいにしんと鳴いている

「五億年」部分

核戦争をしなくても、やがて人類はいなくなる。宇宙の摂理である。権力を持つものに踊らされて死に急ぐことだけは避けなければならぬ。人類は数百万年前に森から出て直立二足歩行を始めた動物の一種だったが、自分たちの住む地球の破壊者になってしまったか。

人類生存のためには、持続的な循環型社会にしなけれ